近代沖縄における方言札（7）

― 補　遺 ―

近　藤　健一郎

はじめに

本稿は、本論集第47号から第52号に連続して発表した「近代沖縄における方言札（1）」から「同（6）」の補充を行うものであり、この一連の資料紹介の最終稿である。

これまで私は、近代沖縄教育史の実態を解明していくことを目的として資料紹介を行ってきた。すなわち、近代沖縄の学校において沖縄言葉[1]を話した児童生徒に渡された罰札である方言札に注目することによって、標準語教育政策が、さらには大和化政策が教室においてどのように具体化していたのかを明らかにしていくことを目的とする資料紹介であった。

これまでの六稿によって、学校記念誌にみる方言札に関する資料調査報告は沖縄県全域を網羅したのであるが、拙稿にて発表後に学校記念誌が刊行されたものや、調査漏れが見出されたため、それらの補充が必要であると考えられる。そこで本稿では、上記のような理由に基づく学校記念誌に関する補充の調査報告を行い、これまでの稿と同様に、学校記念誌に掲載されている回想記や座談会記録を資料として、近代沖縄において、方言札がどの時期にどの程度、またどのように存在していたかを確かめることを課題とする。それにより、これまでの調査を可能な限り万全なものとすることを意図している。

さて、沖縄教育会が編集した『昭和十年一月現在　沖縄県学事関係職員録』を利用して、小学校を特定したうち、「管見の限り学校記念誌が確認できなかった」としてきた小学校は合計で26校である。それらの学校を以下の＜表１＞の小学校名(1935年)の欄に記した。あわせてその表には以下の事項を掲げた。小学校名（1935年）の右側に現在の小学校名（廃校となっている場合はその旨）

を、今回補充の資料紹介をできる場合はそのさらに右側に学校記念誌の書名・刊行年を、そして最も左の欄には小学校の所在する島名、沖縄島にあっては現在の市町村名を記した。最も右の欄に注として記した数字は、本来ならばどの稿で紹介すべきであったかを示している。確認しておけば、1は八重山、2は宮古、3は沖縄島周辺の島々、4は沖縄島南部、5は同中部、6は同北部である。

その他、1935年当時には分校という扱いになっていたものの現在は独立校として学校記念誌を刊行しているもの、拙稿にて発表後に新たな学校記念誌が刊行されたもののうち調査の結果方言札の回想記を含んでいるもの、これらを＜表2＞に整理した。掲載事項は＜表1＞と同じである。

＜表1＞今回対象とする小学校名とその学校記念誌の一覧

小学校所在地	小学校名（1935年）	現在の小学校名	学校記念誌の書名・刊行年	注
新城島	新城尋常小学校	（廃校）		1
宮古島	久松尋常高等小学校	久松小学校		2
	西城尋常高等小学校	西城小学校		2
伊良部島	伊良部尋常高等小学校	伊良部小学校	『創立百十周年記念誌』1997年	2
伊計島	伊計尋常高等小学校	伊計小学校	『創立百周年記念誌　あやはしの里　いちはなり』2002年	3
津堅島	津堅尋常高等小学校	津堅小学校	『津堅島教育百年誌　東海』2002年	3
屋我地島	屋我地尋常高等小学校	屋我地小学校	『創立百周年記念誌』1988年	3
古宇利島	古宇利尋常高等小学校	古宇利小学校		3
那覇市	那覇尋常高等小学校	（廃校）		4
	那覇尋常小学校	（廃校）		4
	久茂地尋常小学校	久茂地小学校	『久茂地小学校創立九十周年　久茂地幼稚園創立五十周年　記念誌』2002年	4
	小禄尋常高等小学校	小禄小学校		4
	小禄尋常小学校	（廃校）		4
豊見城市	第一豊見城尋常高等小学校	長嶺小学校	『創立八十周年記念誌』1989年	4

	第二豊見城尋常高等小学校	座安小学校	『創立八十周年記念誌』1990年	4
大里村	第一大里尋常高等小学校	大里北小学校	『創立百二十周年記念誌』2000年	4
北谷町	北玉尋常高等小学校	北玉小学校		5
読谷村	読谷山尋常高等小学校	読谷小学校	『創立百二十周年記念誌「はなうぃ」』2002年	5
沖縄市	美東尋常高等小学校	美東小学校	『創立九十周年記念誌』1992年	5
	宇久田尋常高等小学校	（廃校）		5
具志川市	仲喜洲尋常高等小学校	高江洲小学校	・『創立六十周年記念誌』1974年 ・『創立八十周年記念誌』1994年	5
金武町	嘉芸尋常高等小学校	嘉芸小学校		6
名護市	嘉陽尋常高等小学校	嘉陽小学校	『創立九十周年記念誌』2001年	6
今帰仁村	兼次尋常高等小学校	兼次小学校	『創立百周年記念誌』2000年	6
東村	東尋常高等小学校	東小学校	『創立九十周年記念誌』1979年	6
大宜味村	塩屋尋常高等小学校	塩屋小学校		6
国頭村	安田尋常高等小学校	安田小学校	『創立百周年記念誌』1997年	6
		楚洲小学校	『創立百周年記念誌』2001年	6

＜表２＞今回対象とする小学校名とその学校記念誌の一覧（新刊等）

小学校所在地	小学校名（1935年）	現在の小学校名	学校記念誌の書名・刊行年	注
石垣島	白良尋常高等小学校	宮良小学校	『創立百周年記念誌』2002年	1
与那国島	与那国尋常高等小学校	比川小学校	『創立九十周年記念誌ひがわ』1992年	1
粟国島	粟国尋常高等小学校	粟国小学校	『粟国小学校創立百周年　粟国中学校創立五十周年　記念誌』1999年	3
平安座島	平安座尋常高等小学校	平安座小学校	『創立百周年記念誌　夢雄飛』2003年	3
読谷村	渡慶次尋常高等小学校	渡慶次小学校	『創立百周年記念誌』2002年	5

なお＜表１＞に掲げたうち、『津堅島教育百年誌　東海』（津堅尋常高等小学校）、『久茂地小学校創立九十周年　久茂地幼稚園創立五十周年　記念誌』（久茂地尋常小学校）、『創立百二十周年記念誌「はなうぃ」』（読谷山尋常高等小学校）は戦前の回想記や座談会記録を含んでいないため、検討の対象外とせざるを得なかった。また＜表２＞に掲げたうち、白良尋常高等小学校と与那国尋常高等小学校については、「近代沖縄における方言札（１）」において本校にあたる白保小学校と与那国小学校の調査結果を報告したが、今回分校にあたる現・宮良小学校と現・比川小学校の調査結果を報告することとした。

1．学校記念誌に掲載された回想記・座談会記録はどのように方言札に言及しているか？

＜表１＞及び＜表２＞に掲げた学校記念誌に掲載された回想記や座談会記録において、方言札に言及しているものを以下に列挙する。ただし本稿の目的と紙幅の関係から、戦後の方言札に関する回想は省略した。なお方言札に言及しているものであっても、自身の体験でない伝聞や、方言札に関する意見などは割愛した。方言札の存在をどれだけ確かめられるかを調べるためには、体験したことについての回想のみを拾うことが必要だからである。

列挙するにあたって、およその年代を把握するために、便宜的に、1900年代前半、同後半、1910年代前半、同後半、1920年代前半、同後半、1930年代前半、同後半、1940年代前半にわけて列挙することとする。ただしこの年代は、何年生の時のことと明確に回想している場合を除き、小学校在学の半ばにあたる小学校中学年の年代に区分した。あわせて、回想している人の小学校への入学年度をそれぞれの氏名の直後に記した。これは回想などにおいて入学年に触れている場合はそれにより、また卒業年に触れている場合は逆算したものを原則とした。なかには入学年や卒業年に触れていないものもあるが、生年などから入学年を推測し？を付けた。ただし、それらの手がかりも無く、いつ頃の回想かは分かるものの入学年不明、さらにはいつ頃の回想か不明とせざるをえなかったものもあった。

①白良尋常高等小学校

B　宮良分校（現・宮良小学校）

方言札への言及は確認できなかった。

②与那国尋常高等小学校

B　鬚川分校（現・比川小学校）

・1930年代前半

一番怖かった事は、方言札でありました。方言する人が見つからない内は自分の懐に何時間も持っていなければならないので勉強する気にもなれない程でした。　　＜牧野トヨ子（1931年入学）「小学校時代の思い出」124頁＞

③伊良部尋常高等小学校

・1940年代前半

「何時でも何処でも標準語」「三つ子の時から標準語」「夢でも忘るな標準語」「日本語これぞ未来の世界語だ」等々。色々な標語が、教室や廊下や中庭のガズパナ木、便所の前のドフオ木や井戸の南のモクモー、南の運動場の松の木やセンダンの木等いたる所に掲示されて全校が標準語励行一色でした。もし方言を行った者には、罰として「方言札」、科札、「パイツア」をトガ人として首に掛けます。パイツアを首に掛けられたトガ人は次の違反者を探してタッチする仕組みです。トガ人にはならないように何でも大和口で喋るのに四苦八苦です。

たとえば、リンパ腺を、方言でインマラダニ。これを大和口で犬のケンタマコウガンと言い、豚のレバーを豚の心と発音したり実に滑稽な話です。しからばボトロ・テラザ・ヤドモリ・ピラザ・アンデリ・オモガイ等はどう発音する。実に困ったもんだ。そこで方言札に便利な規則がありました。どうしても大和口で言えない場合は、「方言で言ったら」と前置きしてから方言を喋る事が許されるとの事です。すると右も左も、方言で言ったらホーゲンターラ、の連発でした。私はトガ人第一号ですから、パイツアを首に掛けて次の犯人を必死になって探しました。アガイタンヂ、と聞こえました。それ来たとばかり、おしいM君、今アガイタンヂと言ったでしょう、それ方言だと言ったら、逃げ足の

早いM君が走って逃げながら、ホーゲンターラ、フソオドフアオダーラと言いました。私はカッとなって、方言で言ったらと前置きする余裕もなく、ウワーバカマーンテーコノヒヤアと大きな声でさけんでしまいました。これを聞いていた女子グループが、まるでクイチャー踊りでも踊るようにパチパチと手拍子で足をたかくあげて、アラモーアラモーマチガーカンキチが方言いうた、センセーに言うぞセンセーに言うぞと唄いながら踊って、はしゃいでいました。

＜松川寛吉（1937年入学）「男女組と方言札」67～68頁＞

④粟国尋常高等小学校

・1920年代後半

学校に来れば標準語励行等と、慣れない言葉を一生懸命使おうとするものの、表現が難しくなると方言にかわったり、そこで方言札なるものを首から掛けられる始末だった。

＜新里政範（1922年入学？）「母校に感謝」、『創立百周年記念誌』150頁＞

⑤平安座尋常高等小学校

・1930年代前半

方言札なるものがあったが、貰っても余り苦にはならなかったが、次に方言を使う人を見つけるのが大変だった。

＜前森一徳（1929年入学）「七〇年前の小学校」54頁＞

⑥伊計尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑦屋我地尋常高等小学校

・1920年代前半

学校で方言を使おうものなら、すぐ方言札が渡されましたよ。

＜真喜志康篤（1917年入学）「座談会・屋我地小学校を語る」282頁＞

⑧第一豊見城尋常高等小学校

・1910年代後半

6年のとき、一級上の先輩が機械場で何か話しかけてきた。方言で返事をしたら「あなた、方言使ったね」といって、方言札を渡された。初めてのことで人に渡すことをわからないで持っていた。後で、どこへ持って行くのかと聞いたら「おまえは掃除当番だ」といわれた。／方言があまり激しく使われたときに、ときどき方言札が回った。

＜長嶺輯徳（1914年入学？）「座談会　明治、大正時代の母校を語る」43頁＞

・1920年代前半

方言札というものがありましたよ。

＜金城昌徳（1918年入学？）「座談会　明治、大正時代の母校を語る」43頁＞

（方言札は―引用者）年から年中あったわけじゃなかったですね。

＜金城幸一（1920年入学）「座談会　明治、大正時代の母校を語る」43頁＞

⑨第二豊見城尋常高等小学校

・1900年代後半

字豊見城に学校があったころには（1908年3月まで通った第一豊見城尋常高等小学校を指しており、同年4月から新設された第二豊見城尋常高等小学校に入学した―引用者）、標準語励行ということで方言を使った者に対しては、週番が廻ってきてつかまえて方言札をかけた。休み時間はほとんど方言であった。

＜当間邦彦（1904年第一豊見城尋常高等小学校入学）「本校第一期生」85頁＞

・1920年代後半～1930年代前半

私達小学校時代のころも方言札はありましたよ。

＜当銘武夫（昭和初期に在学）「学校の思い出を語る」74頁＞

・1930年代前半

学校教育で方言札は、ひとつの思い出ですよ。

＜赤嶺茂（1938年に高等科に在学）「学校の思い出を語る」74頁＞

⑩第一大里尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑪渡慶次尋常高等小学校

・1940年代前半

学校で方言を使うと「方言札」を与えられました。

＜与那嶺信子(1940年入学？)「母校の百周年にひとこと(一口コメント)」188頁＞

⑫美東尋常高等小学校

・1920年代前半

校内では、方言札が使用され、方言を使った生徒は掃除当番とか、廊下に立たされる等色々の罰が加えられたものです。

＜島袋美智子（1919年入学）「回想」137頁＞

・不明

方言札がありましたね、方言を使ったら、この札を持たされました。そして、札を渡すために、方言を使っている人を見つけようとして歩きましたよ。

＜内間キヌ（入学年不明）「美東尋常高等小学校時代を語る」156頁＞

標準語がわからないときは、「今は、方言よー」と断ってから、方言を使いましたよ。＜金城キク（入学年不明）「美東尋常高等小学校時代を語る」156頁＞

標準語励行で、方言をつかったら便所当番させられた。標準語はわかるんだが、相手も使わないし、私も毎日使わないから、標準語がすぐには出てこない。わんねぇ、毎日、方言札当番だったですよ。

＜当真嗣賢（入学年不明）「美東尋常高等小学校時代を語る」156頁＞

⑬仲喜洲尋常高等小学校

・1930年代前半

方言を使ったら、方言札（木製の紐付き）を渡されてですね、学級のなかで誰か方言を使った者を見つけるまでは、その札を首につるしたままでしたよ。先生が「君達は日本人じゃないか。日本語を使いなさい、家に帰ったら方言でもいいんだが、学校では日本語を使いなさい」とよく言われましたね。

＜又吉光一(1931年入学)「座談会　昭和期を語る」、『創立八十周年記念誌』237～238頁＞

・1930年代後半

方言札をのがれるために、よじ登ったガジマル
<喜久山源栄（1936年入学）「少年の日を思う」『創立六十周年記念誌』41頁>

⑭嘉陽尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑮兼次尋常高等小学校

・1920年代前半

高等科生が（方言札を―引用者）持って歩くわけです。私たちが小学生時代のことです。

＜仲宗根マツ（1917年入学）「座談会　思い出を語る　Ⅰ戦前編」266頁＞

標準語奨励で、方言を使うと方言札をかつがされた。二メートル位の大きい札で次の人に渡さないといつまでも持って歩いた。「私、方言しました」と書いて運動場を回りました。大正の十二、三年までのことです。

＜玉城鎮夫（1918年入学）「座談会　思い出を語る　Ⅰ戦前編」266頁＞

・1920年代後半

方言使用罰則制度として方言札のやりとりや、家庭に於ける挨拶等で、方言札を他人に渡す要領や、家庭で馴れない挨拶を勇気を出して折角やった場合に、心ない父親達から「ヤーニンズンイエーシチスンナー（家族同志が挨拶するのか…）」とどやされる等のおもしろおかしいエピソードや仕草が残っている。例えば一寸でも早く方言札を他人に渡さんと考えたら、相手に近づき、とっぴに相手にぶつかったりひねったりすると思わず相手が「アガー」と発声、すかさず「ハイ方言札を」と言いざま札を渡す。至って簡単だが、一寸油断するとすぐ我が身に帰ってくる。

＜山内昌範（1926年入学）「兼次校・在りし日の思い出」221頁＞

・1930年代前半

共通語励行がされていて、方言を発した者には罰として十五センチ位いの紐付き板札を渡される。その木札を次へ申し送りする為めに方言をする者探しに懸命になった。共通語励行が行き届き他校からの参観者もよく来校されて、他

府県にも評判になった学校でした。

毎日の朝礼場では方言、ハンカチ、チリ紙、服装、ボタン。更に弁当等の調べがあって、方言札を持って居る者は朝礼後に残されたのである。

＜親川繁（1929年入学）「回想」211～212頁＞

方言札というのがあって、この方言札を相手に渡したかったらそばに行ってつねる。そしたら「あがっ」って言うでしょう。「方言した」と渡す。それからキチガイのガイは方言でカニのことだから、キチカニと言ってみたりね、今泊の言葉でシービーサというのがあるけど、あれは岩ざむい。トウンタチーはとびたちすわり、こういう面白い直訳、標準語があった。

＜山内昌敬（1930年入学）「座談会　思い出を語る　Ⅱ戦中編」279頁＞

⑯東尋常高等小学校

方言札への言及は確認できなかった。

⑰安田尋常高等小学校

A　安田尋常高等小学校（現・安田小学校）

・1920年代後半

3、4年の頃から標準語励行という校規があって私達は札を渡されると休み時間に運動に夢中になっている下級生の足を故意に踏んで「アカー」と言わせて渡した時もあり想い出すたびに懐かしい。

＜神山義秀「安田小学校創立百周年に寄せて」209頁＞

・1940年代前半

標準語励行の徹底も厳しく、一日の授業が終わると、教室を雑巾がけし、窓ガラスを拭いて下校するまでの間、よく方言札が持ち回されたものです。

＜西銘晴完「旧校舎の思い出」215頁＞

B　同校楚洲分校（現・楚洲小学校）

・1940年代前半

方言札というのは方言を使うとその人に札を渡すということですが、わざと

ですな、方言を使わすようなしぐさをして相手に言わせて、方言使ったといって札を渡して自分は免れるというようなことです。（「札の大きさはどのくらいでした」との司会の問いに）大きさはですね、十センチに二十センチ位だったと記憶しています。　＜徳元将信（1942年入学）「楚洲小学校を語る」170頁＞

2. 学校記念誌に掲載された回想記・座談会記録から方言札の存在がどのくらい確かめられたか？

今回の補充調査では、以上の方言札に関する回想記・座談会記録を得ることができた。それにより、小学校ごとに、どの年代に、どの程度の記録が得られたかを一覧表にまとめたものが、＜表３＞である。それぞれの記号の意味は以下の通りで、それぞれの印の直後にある数字は回想をしている人数を表している。

○　方言札の存在に言及しているもの。

◎　方言札の存在に加えて、何らかの罰（ただし、方言札を首から下げるということを除く）を受けたことについても言及しているもの。

また、小学校あるいは分校が設置されていなかった場合には／で示した。

＜表３＞方言札に関する回想記・座談会記録の一覧

小学校名	00年代前半	00年代後半	10年代前半	10年代後半	20年代前半	20年代後半	30年代前半	30年代後半	40年代前半	注
（宮良）										
（鬚川）							○1			
伊良部									○1	
粟国						○1				1
平安座							○1			2
伊計										
屋我地					○1					
第一豊見城				◎1	○2					
第二豊見城		○1					○1			3
第一大里										
渡慶次									○1	
美東					◎1					4
仲喜洲							○1	○1		
嘉陽										
兼次					○2	○1	○2			
東										
安田						○1			○1	
（楚洲）									○1	

（注１）その他に「近代沖縄における方言札（３）」で紹介したものがある。
20年代後半　◎１。 40年代前半　○２。
（注２）その他に「近代沖縄における方言札（３）」で紹介したものがある。
40年代前半　○１。
（注３）1920年代後半～1930年代前半　○１。
なお、1900年代後半の○１については、第一豊見城尋常高等小学校での体験を回想したものである。
（注４）時期不明（1910年代後半～1940年代前半）　○２、◎１。

おわりに

以上のように、学校記念誌に掲載された回想記・座談会記録から、方言札の実態についての資料を得ることができた。本稿は補充の調査報告のため、方言札の実態について特徴的なことのみ指摘してまとめにかえたい。なお、丸カッコ内は、回想をしている人が通った学校名とその人の氏名である。

①1930年代の沖縄における標準語励行において、沖縄島北部今帰仁村の兼次尋常高等小学校は地域ぐるみで取り組むなど、当時から注目されていた[2]。「共通語励行が行き届き他校からの参観者もよく来校されて」という回想（兼次・親川繁）は、沖縄での標準語励行運動に影響力があったであろうことを示している。

②方言札を渡されそうになったら「走って逃げ」る児童がいたこと（伊良部・松川寛吉）、方言札を逃れるためにガジュマルに登った児童がいたこと（仲喜洲・喜久山源栄）などは、方言札を持っていることを何とか免れようとし、また渡されないようにしようとしたことを示している。そして、ガジュマルに登ってまで方言札を逃れようとするという事実は、方言札を渡すという行為も児童間の力関係によっていたであろうことを読み取ることを求めている。

③方言札の大きさについて、「十センチに二十センチ位」（楚洲・徳元将信）というおそらくその程度であろうという回想も見られたが、「二メートル位の大きい札」（兼次・玉城鎮夫）という実際にはありえない大きさを回想している場合もあった。後者は、児童にかかる方言札の精神的な圧迫感を表していると考えることができるのではないだろうか。

④方言札を使用することについて教師が、「君達は日本人じゃないか。日本語

を使いなさい、家に帰ったら方言でもいいんだが、学校では日本語を使いなさい」と話していたことを回想したものが見出せた（仲喜洲・又吉光一）。方言を話してはならず、標準語を話さなければならない理由を「日本人じゃないか」という点に求めて児童に説明していたこと、そして実際の生活で沖縄言葉を用いているという状況ゆえに、せめて「学校では」標準語を話すことを求めていたことは重要である。ここには、1930年代前半において標準語励行は学校内でのみ取り組まれていたという現実[3]が反映しており、それゆえ「日本人」であるために標準語で話すことを強いていく教師の論理が示されている。そして1920年代後半の体験として、父親が「ヤーニンズンイエーシチスンナー（家族同志が挨拶するのか…）」と標準語で話すことに嫌悪感を示していた回想があったことも重要であろう（兼次・山内昌範）。学校での、また地域での言語使用について、時期区分をしながら考察していくことは今後の課題である。

さて、一連の調査報告はこれで終了することとする。この調査過程で得られた資料を基としつつ、『沖縄教育』の調査を進め、教師の標準語教育に対する多様な意識や実践を解明することが今後の課題としてあげられる。同時代史料により、教育実践の具体像とそれを支える教育論、標準語論を明らかにし、本調査で得られた学習者の体験と架橋し、「教えと学び」の総体を解明していくことを行っていきたい[4]。

（注）

1 沖縄で用いられ続けている言葉、いわゆる沖縄方言について、沖縄人がウチナーグチと呼ぶことを借用し、その意味である沖縄言葉と表記することとする。ここでは、日本語は方言区画において本土方言と沖縄（琉球）方言とに大きく分けられることを考慮して、他の方言と同列の扱いにならないように沖縄（琉球）方言と表記することを避けると同時に、日本語とは別の言語であるとする沖縄（琉球）語と表記することも避けている。

2 新聞報道として、「沖縄語を完全に駆逐　兼次小学校」、「沖縄名物標準語の村　兼次校区域を表彰」、『大阪朝日新聞』鹿児島・沖縄版、1937年2月13日付、1939年5月5日付。また山城自身が自らの標準語励行実践について述べたものとして、山城宗雄「標準語励行の問題」、沖縄県教育会『沖縄教育』第273号、1939年5月。さら

に山城校長のもとで教員を勤めた人たちや教育を受けた人たちなどによる著作として、山城宗雄伝編纂委員会『平凡持久』私家版、1969年。

3 戸邉秀明「沖縄　屈折する自立」、小森陽一ほか編『岩波講座　近代日本の文化史』第8巻、岩波書店、2002年、286頁。

4 この点については、前掲した拙稿「学校記念誌にみる近代沖縄における方言札」で言及した。同時にこれ以外の研究課題も掲げたので、ここでは重複を避けるため、第一の課題を簡略に記すにとどめた。

（付記）

・本稿は、平成16年度科学研究費補助金（若手研究B）「近代沖縄における標準語教育実践史研究―学校と地域の関係に注目して―」（課題番号15730366）による研究成果の一部である。

・これまでの一連の資料調査に基づいた考察を、「学校記念誌にみる近代沖縄における方言札」を南島史学会『南島史学』第63号、2004年に発表した。ご参照いただければ幸いである。

・本稿の調査にあたって、沖縄県立図書館、同宮古分館、同八重山分館、沖縄県公文書館、同史料編集室、沖縄県立総合教育センター資料室、石垣市立図書館、石川市立図書館、浦添市立図書館、具志川市立図書館、平良市立図書館、名護市立中央図書館、那覇市立中央図書館、琉球大学附属図書館に、閲覧の便宜を図っていただきました。記して感謝します。